



子供の人権を守るために

富山市立興南中学校3年 福村 彩華

私が生まれて間もない頃、母と父は離婚した。それからの幼い私は、父と離れ、母の元で暮らした時期、兄妹と離れて暮らした時期、母に見捨てられ、一人で施設に入り暮らした時期などがあり、様々な場所で様々な人と過ごしてきた。そして、今は、父が再婚し、父と血の繋がっていない母・兄妹・祖母と一緒に生活をしている。幼い頃の出来事だが、今でもその時に感じた辛く寂しい思いは、嫌になるほど覚えている。忘れたくても忘れられない。心のタトゥーみたいなものだった。

私は、この過去の出来事から、家庭環境による子供の人権について考えたことがある。それは、子供の人権を守る存在は大人であるということだ。過去の私には、決める権利がなかった。住む場所も一緒に住む人も私が望むものではなかった。生まれて間もない頃に喋られないから仕方ないのかもしれない。でも、それが私が成長した時に私を苦しませる材料となるのなら、誰が責任を取ってくれるのだろうか。決して、私は、過去を勝手に決めたことに文句を言っているわけではない。少しは、私のことを考えてくれたと思うし、何より、過去を刻んだ以上、それを言い訳にせず、今を正解にしていくことが、私にできることであるから。でも、このような人は、私以外にもたくさんいると思う。子供の権利や人権を大人が奪って良いのだろうか。子供の純粋な心を大人の事情によって苦しませて良いのだろうか。大人の事情で嫌な思いをしたり、子供の未来が奪われたりすることは、立派な人権侵害だと思う。だからこそ、保護者が最後まで自分の手で子供を育てる責任を持つことが必要であると思う。

また、私は、過去の経験から、家族についての理解が変わっていた。私は、施設での生活の時、血の繋がっていない、年齢も性別も異なった、共通点が少ない人と過ごしていた。しかし、その場所での生活は、とても温かいものであったと思う。ころころと変わる環境に身を置き、母に見捨てられ、内気な性格だった私に、施設の先生やみんなは、にこやかな笑顔で話しかけてくれた。私はその時、孤独だった心に優しさが溶け込んでいくような気がして、本当に嬉しかった。家族は、血が繋がっている。だから、なんでも分かりあえる。なんてことはない。施設の人や現在の母のように、血が繋がってなくても、安心

できる人がいる。逆に、血が繋がっていても、安心して暮らせないような人もたくさんいる。「家族」それは、安心して一緒に暮らすことのできる人。これからも、私は、自分が安心して一緒に暮らすことができると思う家族を大切に、生きていきたい。

家庭環境や親の選択によって子供の夢や希望が制限される現代。そんな現代の家庭による子供の人権侵害は、外から見ると、最も気づきにくいものであり、自分から言い出しにくいものであり、簡単に改善できないものである。だからこそ、年々家庭内での人権侵害の事例が多くなっていき、本当は生きる権利のある子供が命を落としていくのだと思う。では、私達ができることは、何なのだろうか。それは、「弱さを見せる強さを持つこと」である。弱さを見せる強さを持つことは、相手に相談する時のことである。生きていれば誰だって、一つや二つ、心に傷を負っている。でも、いつだって私達は、自分の心の中しか分からない。それを他人に見せるか見せないかはその人の自由だけれど、もし、それが原因で自分を壊してしまうのなら私はすぐに誰かに打ち明けてほしいと思う。私も、今までこの過去の出来事を誰にも話せなかった。でも、少しでも私と同じ思いをしている人の力になりたくて、大人の皆さんに訴えたくて、勇気を出した。自分の弱みを見せるのは、怖いかもしれない。でも、自分の弱みを見せると、人は必ず強くなれる。私は、そんな人を心の底から応援し、全力で支えたい。

家庭環境による人権侵害は、私達にはこんな対処法しかできない。でも、大人という存在が変われば、この問題自体がなくなっていくのではないだろうか。子供には、大人の皆さんの気持ちなんて分かりたくても分からない。でも、どんなに小さな子供でも大人と同じ量の人権をみんな必ず持っている。だから、私は、子供だけど、大人に意見を言う。子供だからこそ、大人に意見を言う。今は小さな叫びだけれど、いつか大きな叫びになることを願って。現実から目を背ける大人を奮い立たせ、多くの子供の人権を守るために、私は、努力を続ける。弱さを見せた強い心で。